

ヴェネチア建築と文人たち

鳥 越 輝 昭

〈目 次〉

はじめに

1. 聖マルコ広場
 2. 評価の二度の逆転
 3. 二度目の逆転
 4. 二度目の逆転の背景
 5. 転換
 6. ルネサンス以後の建築物への嫌悪
 7. ラスキニ
 8. 悪影響
 9. バロックとロココの教会建築
 10. 評価の好転
- おわりに

はじめに

ヴェネツィアは、都市として千年を越える歴史を持っている。しかも、他のヨーロッパ諸都市が近代化によって風貌を大きく変えていった時期に、幸か不幸か近代化しそこなったし、また現代になってからは意識的に古い建物や町並みを保存してきた。その結果、この小さな町のなかには、十一世紀から十八世紀に至る、ビザンツ、ゴシック、ルネサンス、バロック様式等の建物が軒を接して存在し、その狭間に少数の十九世紀と二〇世紀の建物が散在する状態になった。しかもヴェネツィアの町並みの特徴は、教会や館のような、当然文化財保護の対象になりそうな建物だけでなく、庶民の暮らす陋屋もまた数百年を経た歴史的建造物である点にある。その意味で、ヴェネツィアは町全体が、さまざまな様式の建築物——大多数は古建築物——の博物館であるといつてよい。

そういうさまざまな建築様式の混在状態が作りだす景観全体をどう感じるか、あるいは特定の様

式についてどう感じるか、見る者の反応はさまざまである。しかし、その反応は個人的なものでありながらも、ある程度それぞれの時代による傾向の違いがみられる。

この拙稿では、そういう傾向の変遷をおおまかに辿ってみたい。むろん、それぞれの時代のなかでも個人間で反応の揺れは当然あるし、建築様式自体が相互に截然と区別出来ない場合が多いし、わたくしが眼を通すことのできた一次資料も限られているから、以下に綴るのは、あくまで暫定的記述である。しかしまたその一方で、調査をかさねても、問題の性格上、決定的な結論がでると思えない。

ロシア生まれの詩人プロツキー (Joseph Brodsky, 1940-96) が、知り合いのヴェネツィア女性の夫についてこんなことを書いている。

夫のほうは、あまりありきたりなのでどんな風采だったのかを全くおぼえていないが、言ってみれば建築家の屑。ヨーロッパのスカイラインをナチの空軍などよりもっとメチャメチャに破壊した恐るべき戦後派の一人だった。このヴェネツィアでも、二、三のすばらしい^{カンボ}広場を、彼のつくった建物でだいなしにしていた。(『ヴェネツィア——水の迷宮の夢 Watermark』1992, 金関寿夫訳, p. 22*1)。

これは、現代建築を、そしてそのみをヴェネツィアの景観中の異物と見る立場である。プロツキーの立場は、すでに二〇世紀の初頭 (1901 年) にドイツ人作家ヘッセ (Hermann Hesse, 1877-1962) が採っていた立場と同様のもので、その延

長線上にある。ヘッセはこう書いていた。

……ほんとうに、ここには、「現代のヴェネツィア」は存在しないのだ。水のなかに横たわっているこの都市は、今でも古いヴェネツィアであり、それは若くはならず、年を取ったヴェネツィアである。ここには、不快で無粋な現代のファサードの連なる街路は一つもない ("Venezianisches Notizbüchlein", 1901^{*2})。

あいにく、ヘッセがこう書いたあとで、少数ながら「不快で無粋な」現代建築がヴェネツィアの街に建てられてしまった。プロツキーはその状態を批判しているわけである。

しかし、プロツキーやヘッセのように、ヴェネツィアの町並みを、そこに現代建築がないだけで美しいと感じるようになるまでには紆余曲折があった。ヴェネツィアの町並みに関する見方の歴史のなかでは、他の様式の建物も異物とみなされてきたのである。

1. 聖マルコ広場

まず、聖マルコ広場と周囲の建物がどう見られてきたかを瞥見してみよう。この景観は、ヴェネツィアという都市の中心となっているために、見る者の姿勢が集中的に表れる場合が多いのである。

米国人ハウエルズ (William Dean Howells, 1837-1920) は、のちに作家として名をあげる人物だが、十九世紀後半の 1866 年に、この広場について、つぎのように書いた。

……仮に一連の立派な建築物が、何かあるものに敬意を表することがありうるとすれば、聖マルコ広場はその榮譽を受けて当然であろう。これは、ヴェネツィアについてだけでなく、世界全体についてもいえることである。世界中の他のどの広場も、これほど美しい区域のなかに置かれてはいないだろう。聖マルコ広場は、西側は皇帝の宮殿に終わっている。

広場の側面の区切りは、右は新財務官邸、左は旧財務官邸によって形成され、東側は、ほぼすべて聖マルコ聖堂によって埋められているが、わずかな空間が残っていて、そこにゴシック様式の精華である統領宮殿がかいま見られる (Venetian Life, p. 55^{*3})。

ハウエルズが、聖マルコ広場を総体として世界有数の美しい場所だと思っているのが知られる文章である。

広場を取り巻く建物群についても、ハウエルズは、統領宮殿 (Palazzo Ducale, 1340-1411 建築) を「ゴシック様式の精華」と称えているし、また、「美しい区域」を形成しているというのであるから、新旧の財務官邸などをも美しいと感じたのであろう。そしてハウエルズは、聖マルコ聖堂 (Chiesa di S. Marco, 1063-94 建築) についても、その美しさを大いに好んでいた。つぎの文章から、それがわかる。

聖マルコ聖堂は、巨大な鐘楼や、そびえ立つ宮殿群との対照によっても、みすばらしく見えたりしない。むしろ、起立して敬意を示す人々のなかにいる女王のように見える。聖堂の内部では、宗教心を深くかき立てられるのを感じる。しかし、聖堂の内部が天上的であるとすれば、聖堂の外部は、善良な人の日常生活と同様に地上的である。人を最初にこの聖堂に引き寄せるのは、この地上的で魅力的な美しさである (Ibid, p. 56)。

こうしてハウエルズは、聖マルコ広場に関しては、全体の景観についても、個別の建物についても美しさを称えたのである。この広場を絶賛したといってよいであろう。

しかしハウエルズの百年前、1765 年にこの町を訪れた若きエドワード・ギボン (Edward Gibbon, 1737-94) ——のちの大歴史家——の聖マルコ広場について感想は、「わたしがこれまで見たなかで最悪の建物で飾られ、水よりも陸地の多い点だけがみごとな大広場」、というものであつ

た*4。これは、まぎれもない酷評である。

もっとも、ギボンの感想は大ざっぱにすぎる嫌があるのですが、もう少し詳細な感想を見ることにしよう。それは、同じ十八世紀の1739年にこの町を訪れたフランスの文人ド・ブロス (Charles de Brosses, 1709-77) の感想で、*Lettres d'Italie**5 (1939-40) に述べられたものである。

まず、聖マルコ広場全体についてのド・ブロスの評価は、こういうものであった。

聖マルコ広場は、広く喧伝されるものなので、かぎりなく壮大な広場だと信じておられるかもしれません。実際は、それよりはるかに劣ります。なるほどしっかりと造られてはいますが、壮大さの点でも、建物の印象の点でも、パリのヴァンドーム広場よりずっと劣ります (*Lettres d'Italie*, I, p.189)。

ド・ブロスの印象を悪くしたのは、もっぱら統領宮殿と聖マルコ聖堂である。統領宮殿について、ド・ブロスは、「前代未聞の劣悪な代物で、鈍重で、陰気で、ゴシックまるだしの、悪趣味の極み」、と書いた (*Ibid.*, p.207)。そして聖マルコ聖堂についてはこう書いたのである。

あなたは、これが素晴らしいところだろうと想像されていたでしょう。それが大外れなのです。これはギリシア風の、背の低い、中まで光の通らない、外も中もひどい趣味の教会です。建物は七つ〔ママ〕の丸屋根で覆われているのですが、屋根の内側を金づくめのモザイクで飾ってあるので、丸天井というよりも大鍋のように見えるのです (*Ibid.*)。

広場の重要な要素である統領宮殿と聖マルコ聖堂とに、このように嫌悪を催せば、広場全体の印象が悪くなったのも無理はない。

ところで、ド・ブロスの記述で注目したいのは、広場の周囲の建物のなかに、気に入る建物もあったことである。それが、広場の北と南の側面を形成している新旧二つの財務官邸であった。ド・ブロスは、「これら二つの建物は長大な住棟で、屋根

を彫像で飾った、堂々たる建築物です」、と書いた (*Lettres d'Italie*, I, p.189)。この評価を、聖マルコ聖堂と統領宮殿への酷評と比べると、その差が明瞭であろう。ちなみに、北側の旧財務官邸 (Procuratie Vecchie, 1496-1532 建築) は一般にルネサンス様式、南側の新財務官邸 (Procuratie Nuove, 1586-1616 建築) は一般にバロック様式に分類されている建物である。

ド・ブロスと同様の評価は、ややのちのスコットランド人作家ムーア (John Moor, 1729-1802) によっても繰り返されている。ムーアの著書 *A View of Society and Manners in Italy* (2 vols., 1780) のなかから、聖マルコ広場に関する感想を読んでみよう。

統領宮殿、聖マルコ教会、聖ジェミニアーノ教会、そして新財務官邸・旧財務官邸と呼ばれる立派な一連の建物 (このなかには、博物館、公共図書館、聖マルコ教会財務官用の九つの執務室がある)。これらは、すべて大理石で建てられている (*A View of Society and Manners in Italy*, vol. I, p.46*6)。

「立派な一連の建物」という表現が、新旧の財務官邸だけに使われている点に注目してほしい。ちなみに、記述の内容から判断すると、ムーアは、聖マルコ図書館 (Libreria Marciana, 1537-84 建築) も財務官邸の建物に含めているように見えるが、この図書館はサンソヴィーノ作のルネサンス様式である。

ムーアの文中にいう「聖ジェミニアーノ教会 Chiesa di S. Geminiano」(1557 建直し) は、聖マルコ広場西端にかつてあったルネサンス様式の教会である。ムーアは、これを、「聖ジェミニアーノ教会はサンソヴィーノ作の優雅な建築物である」、と誉めた (*Ibid.*)。ちなみに、この教会は十九世紀初頭に取り壊され、いわゆる「ナポレオン翼 Ala Napoleonica」、ハウエルズのいう「皇帝の宮殿」、に建て替えられるのである。

さて、ここで新旧財務官邸ならびに聖ジェミニアーノ教会に対するムーアの評価を、統領宮殿と

聖マルコ教会とに対する評価と見比べてみよう。ムーアは、統領宮殿の外観については、「統領宮殿は、すべて大理石による、巨大な建物である」(Ibid., p. 52)、と一言で片づけていて、美しく感じた様子は見られない。聖マルコ聖堂については、つぎのように酷評している。

総大司教教会である聖マルコ聖堂は、いちばん豪華で贅沢な教会の一つなのだが、最初の印象は鮮明でない。建物の様式は混合的で、主としてゴシック様式であるが、多くの柱はギリシア風である。外側は大理石で飾られている。内部は、天井も床も、すべて極上の大理石で造ってある。屋根を支える多数の柱も、同様の大理石である。建物全体には五つの丸屋根が載せられている。ところが、これだけの労力と出費を導いたのが、まことに貧弱な趣味なのである (pp. 49-50)。

贅をこらした労作だが、趣味の劣悪な建物だ、というわけである。

こうしてみると、大ざっぱに言って、ド・ブロスもムーアも、ルネサンス以後の建築物を好ましく思い、中世の建築物を嫌悪した、ということになるだろう。

しかし、ド・ブロスやギボンよりさらに百年以上前の1608年にヴェネツィアを訪れた英国人コーリャット(Thomas Coryate, c.1577-1617)は、旅行記 *Crudities* のなかで、聖マルコ広場についても、その周囲の聖マルコ聖堂や統領宮殿についても絶賛していた。

この町全体のなかでいちばん美しい場所——これは、驚くばかりに比類なく美しいので、キリスト教圏・異教圏のいかなる場所も比肩できない——は、聖マルコの「ピアッツァ」……である。……呆気にとられるほどの輝かしさに、わたくしは、はじめて広場に足を踏み入れたときは驚嘆し、忘我の状態となった。なぜなら、ここには、天下のいかな

る場所にもないような壮麗な建築物があるからだ(*Crudities*, p.171*⁷)。

コーリャットのいう「壮麗な建築物」について、もう少し細かにみると、コーリャットにとって、統領宮殿は、「これまで見たなかで、ぜったいにいちばん美しい建物」(p. 192)であったし、聖マルコ聖堂も「美しい聖マルコ教会」であった(p. 206)。そしてコーリャットは、広場北側の旧財務官邸も「独特の美しさを呈している」と考えたし、南側に建築中の新財務官邸が「完成したら、北側を美しさで凌ぐだろう」とも考えるのであった(p. 174)。

コーリャットの十四年前(1594年)にヴェネツィアを訪れた英国人ファインズ・モリソン(Fynes Moryson, 1566-1630)の感想はコーリャットのものほど表現が多彩でないが、この人物も、聖マルコ広場について、やはり全体的にも個別的にも感心したと見て良さそうである。なぜなら、旅行記 *An Itinerary* (1617) のなかで、モリソンは、聖マルコ広場を「壮大な建造物」といい(*An Itinerary*, p. 85*⁸)、聖マルコ聖堂について、「以前のものより堂々とした建物に立て直された」といい(p. 79)、統領宮殿について、「堂々たる」建物だといい(p. 87)、財務官邸についても、やはり「堂々たる」建物といったからである(p. 85)。

十六世紀から十七世紀への変わり目のころの、この二人の旅行者は、中世の建築物についても、ルネサンス以後の(彼らにとっては現代の)建築物についても、同じ程度に感心していたようである。

2. 評価の二度の逆転

ここでもう一度、聖マルコ広場と周囲の建物に関する反応を、十六世紀末から十九世紀半ばにかけて通時的に捉えなおしてみよう。資料の数が限られているから、絶対的判断はむろん下せないが、いちおうの傾向としていえば、聖マルコ広場と周囲の建物は、一旦、賞賛から酷評へという評価の

逆転を経験し、それからまた、酷評から賞賛へと
という評価の二度目の逆転を経験したことになる。

一回目の評価逆転の背景にあったのは、西洋の
人たちの嗜好が、中世のゴシック的なものから転
じて、古代ローマ的なものへ、そしてさらに古代
ギリシア的なものへと移っていったところにあっ
たであろう。その徴候は、すでに十七世紀半ば、
モリソンやコーリヤットから数十年後には見られ
ようになっていた。1670年に出版された、リ
チャード・ラセルズ (Richard Lassels) の *The
Voyage of Italy* のなかでは、まだ、聖マルコ
広場は美しい場所と見なされているのだが、その
美しさはもっぱら、新旧の財務官邸が作り出す作
用と捉えられている。

聖マルコ広場は、……じつに美しい景観を呈
している。なぜなら、広場全体が、海側から
北の突き当たりまで、アーチと大理石の円柱
に接して造られ、その上には、聖マルコ聖堂
財務官たち全員がいるのにふさわしい美しい
部屋々々が載っているからである (*The
Voyage of Italy*, pp. 400-01^{*9})。

その一方でラセルズは、統領宮殿と聖マルコ聖
堂の外観について、まったく感想を記していない
から、これら二つの中世建築は気に入らなかった
可能性がある。

もっともラセルズは、大運河沿いの館について
は、「いちばん良いのは、ジュスティニアニ、モ
チェニーゴ、グリマーニ、プリウーリ、コンタリー
ニ、フォスカリ、ロレダーノ、グッソーニ、コル
ナーロ」と誉めている (*Ibid.*, p. 425)。これは、
一般的な様式分類にしたがえば^{*10}、順に、ゴシッ
ク (Palazzo Giustinian, 15 世紀建築)、ゴシッ
ク (Palazzo Mocenigo "Casa Vecchia", 1623-
25 建築)、ルネサンス (Palazzo Grimani,
c.1550-61 建築)、ゴシック (Palazzo Priuli-
Bon, 15 世紀建直し)、ルネサンス (Palazzo
Contarini delle Figure, 16 世紀前半建築)、ゴ
シック (Ca' Foscari, 15 世紀建築)、ヴェネツィ
ア風ビザンツ (Ca' Loredan e Farsetti, 12 世紀
建築)、ルネサンス (Palazzo Gussoni-Grimani,

16 世紀建築)、ルネサンス (Ca' Corner della
Ca' Grande, 1532-61 建築) であるから、中世(お
よび中世風)建築とルネサンス建築とが入り交
じっている。

というわけで、ラセルズについては判断が難し
いが、人々の嗜好が中世的なものから離れて古代
的なものへ移ってゆく過渡的状态と見ることもで
きるように思う。つまり、こういうラセルズのよ
うな反応を経由して、ド・ブロス、ギボン、ムー
アの見方へ変わっていったと見ることができそう
だということである。

3. 二度目の逆転

ところで、これからわれわれが注目したいのは、
評価の二度目の逆転についてである。ちなみに、
この逆転のあと、聖マルコ広場と周囲の建物群に
ついての評価はおおむね安定する。むろん質的に
それを好まない人はいるにしても、全般的には
かなり好意的評価がなされるようになるのである。

好意的評価の実例として、ハウエルズの著書と
同じ 1866 年の文章をもう一つ読んでみよう。そ
れはフランスの批評家テーヌ (Hyppolyte-
Adolph Taine, 1828-93) の *Voyage en Italie*
(1866) の記述である。テーヌは、ゴンドラに乗っ
て大運河を下ってきて、出口のところで左を見る。

左側に眼を移すと、そこには聖マルコ聖堂、
鐘楼、広場、統領宮殿がある。おそらく、世
界中でもこれに匹敵するような宝石はあるま
い。……ここを支配しているのは、豊かで多
彩な空想であり、統合をもたらず混交であり、
調和に至る多様性と対照である。それは、女
の首や腕にぶら下げられた八つか十の宝石を
思わせる。それらの宝石は、豪華さか、ある
いは美しさによって調和を作りだしてい
る (*Voyage en Italie*, II, pp. 322-23^{*11})。

聖マルコ広場と周囲の建物を、テーヌは、宝飾
のように美しいと感じているわけである。

聖マルコ聖堂についてのテーヌの感想は「不思議
で神秘的な聖所」(*Ibid.*, p. 323) というもので、

とりたてて美しさを称えているわけではないが、統領宮殿については、多彩なアイディアと美しさを絶賛している。

統領宮殿は、ひと揃いの装身具のなかにある独特のダイヤモンドのように、一頭地を抜いている。……これに類する建物は見たことがない。すべてが新鮮で、月並みなものから脱却しているのが実感される。繰りかえし使用したり使用させられたりする古典様式やゴシック様式を超えたところにも、別の一つの世界があるのだ、人間の工夫は際限のないものだ、ということがわかる。そして、自然の場合と同じく、人間の工夫は、あらゆる規則を破りながら、なお、(そこに閉じこもるように命じられる) あらゆる模範に対立する模範に基づいて完璧な作品を作り出せるのだ、ということがわかる (Ibid., p.325)。

ドイツ人作家フォンターネ (Theodor Fontane, 1819-1898) も、1874年の書簡に、つぎのように書いて、聖マルコ広場の美しさを称えた。

……聖マルコ広場とそれに隣接する小広場。ここには、ただ単に、あらゆる興味深いもの、絵画的なもの、詩的なものがあるだけではないのです。ここにはまた、いかなる意味でも美しいものがあり、ロマンティズムという嗅ぎ煙草を嗅がずとも、われわれは目を見張らざるをえません。これを一時間見るためだけに千時間旅をしてきてても良いほどです。個々の点でも、全体的にも、すべてが独特です*12。

もう一つ、二〇世紀初頭に、トーマス・マン (Thomas Mann, 1875-1955) が『ヴェニスに死す *Der Tod in Venedig*』(1912) に綴った有名な一節を引いておこう。主人公が、船でアドリア海からヴェネツィアの潟へ入り、聖マルコ広場に近づいてゆくところである。ここでも、広場と周囲の建物群が幻想的な美しさをもったもの

として描かれている。

こうして彼はふたたびあの最も驚嘆すべき船着場を眺めることになった。近寄る航海者の畏敬の視線にかつて共和国の示した、あの幻想的建築物の華麗な構図を眺めることになった。宮殿の軽快な美観、溜息橋、岸辺に沿った獅子と聖者との円柱、童話風の聖堂のはなやかに突き出ている側面、門道と大時計とを見通す景観、そういうものを眼に入れながら、陸路を経てヴェニス停車場に到着したのでは宮殿に入るのにわざわざ裏口を選ぶも同然であって、この世にも奇跡的な都を訪れる者は現在の自分のごとく船で、大海を越えてやって来なければならぬのだと悟った (高橋義孝訳*13、一部変更)。

4. 二度目の逆転の背景

ハウエルズ、テーヌ、フォンターネにみられる、こういう評価逆転の背景には、いわゆる「ゴシック・リバイバル」があったであろう。「ゴシック・リバイバル」は、建築の好みにとりわけ顕著に表れた現象である。英国では、十八世紀後半から、建物に中世ゴシック様式を採用するのが流行し始め、これがまもなく大きな潮流となってゆく。そのメルクマールといえるのが、1836年に出版された *Contrasts* という本であった。英国の建築家ピュージン (Augustus Welby Pugin, 1812-52) のこの著書は、賛否両論の激しい反応を引き起こすことになる。この本のなかでは、つぎのような主張がなされていた。

……この国 [=英国] は、機械的工夫の点でどれほど優れているにしても、芸術の進歩についてはほとんど誇るべきところがないのであって、仮に中世のあいだに造られた建物が残存していないとすれば、この国の建築物は極度の軽蔑の対象となるであろう。……わたくしは、現代という時代から、優れた達成という偽りの仮面を引き剥がし、万人の関心を、過去の、より良い時代の真の長所に向けさせたいと思っている。優れたものは、このより良

い時代の残存物のなかにだけ見つかるのであり、このすばらしいにもかかわらず軽蔑されている時代の熱情と才能と感情とを研究することによってのみ、芸術は再興されるし、優れたものを取り戻せるのである^{*14}。

「ゴシック・リバイバル」の潮流はこののち勢いを増し、火事で焼け落ちた英国国会議事堂の再建の際には、ピュージン自身によってゴシック様式で外装・内装がほどこされることになる（1844-56）。この潮流は英国にやや遅れるかたちで、ドイツ、オーストリア、フランス、アメリカにも波及した。ハウエルズやテーヌが、ヴェネツィアの統領宮殿のようなゴシック建築をすぐれた美しい建物と見るようになったのも、「ゴシック・リバイバル」現象の一つの例であったといえるだろう。

しかし、「このすばらしいにもかかわらず軽蔑されている時代」というピュージンの表現からも、そしてその軽蔑にピュージンが挑戦する必要を感じたことから窺えるように、中世建築への嫌悪は根強いものであったようである。

ヴェネツィアのゴシック建築についても、嫌悪はなかなか消えなかったらしい。その証拠に、十九世紀の二〇年代（1828年）に、英国の建築家が著書につぎのように書いている。このジョゼフ・ウッズ（Joseph Woods, 1776-1864）という人物は、まず、聖マルコ聖堂については、「奇妙な様子の教会と大きな醜い鐘楼は、紛れもないものであった。この教会の外見は、なによりも、その極度の醜さによって人を驚かせる」と書いた^{*15}。そして統領宮殿については、こういう感想を述べた。

統領宮殿は、これまでにわたくしがふれたどの建物にも増して醜い。細部については、これを我慢できるものに変える方法は思い当たらない。しかし仮に、この高い壁面が、小アーチを使った二階建ての後ろに置いてあれば、立派な作品になったであろう^{*16}。

この建築家は、聖マルコ聖堂についても統領宮

殿についても嫌悪感を露わにしているが、それは前世紀のド・ブロスやギボンの感じかたを引き継ぐものであった。ド・ブロスのような感じかたは根強く残存していたわけである。

5. 転 換

しかし、こういう旧来の感受性が残存している一方で、それに並行しながら、変化の徴候も表れていた。1817年に、カロリーネ・フォン・フンボルト（Caroline von Humboldt, 1766-1829）というドイツ女性が夫（言語学者ヴィルヘルム・フンボルト）に宛てた手紙には、つぎの一節が見られる。

ヴェネツィアは、新たに、その美しさで限りなく、わたしを捉えました。聖マルコ聖堂、統領宮殿は、ほんとうに幻想的な驚くべき美しさを持っています。その驚くべき美しさは、素材の輝き、これらの円柱、装飾、これらのモザイク、この高価な床——あらゆる独特なものの配置と統制とにあるのです^{*17}。

1837年には、フランスの作家バルザック（Honoré de Balzac 1799-1850）が、手紙のなかで、つぎのように書いている。これは、見てのとおり、聖マルコ広場と周囲の建物についてはないのだが、傾向を示すものということで、引用しておきたい。この作家は、大運河沿いのゴシック様式の館を、こんなふうに思い出す。

その館のつぎにある小さな家に気付かれたでしょうか。十字型のゴシック窓が二つある家で、正面は純粋なゴシック様式です。わたしは、毎日、そこでゴンドラを止めて、何度も、涙を浮かべるほど感動したのです^{*18}。

1852年に、フランス人作家ゴーチエ（Théophile Gautier, 1811-72）が *Italia: Voyage en Italie* に書いたつぎの言葉にも、注目しておきたい。当時、ヴェネツィアはオーストリアの支配下に置かれ、町にはオーストリア軍が駐留していた。そのオーストリア軍の大砲が統領宮殿の脇に据えられ

ていた。ゴーチエは、その状態の不調和感について、こう述べる。

聖マルコ小広場に足を踏み入れた途端に出くわすのが、黄と黒の縞模様のオーストリア軍哨舎と、黄塗りの砲架に載った四門の大砲である。大砲の砲口には蓋がされ、後ろに運搬車が付いている。大砲は、いわば大砲の集積所に置かれているのだが、置かれている場所が、統領宮殿の、小尖塔で飾ったアーケードと背中合わせのところなのである。どういう政治思想を持つかは別として、この光景は、さまざまに見事なものが調和しているなかで、一種の不協和音のような衝撃を与える。詩的なものの直中で、その野蛮さが、重々しい驚きを与えるのである (*Italia*, p. 88^{*19})。

統領宮殿について、ゴーチエが、見事な調和を見せる「詩的」な建物という捉えかたをしているのがわかるであろう。ゴーチエにとって、これは美しい建物だったわけである。

ゴーチエは、聖マルコ聖堂についても、「東方の夢が、魔法使いの力によって石に変えられたような建物、改宗したカリフによって建てられたモスク風教会あるいは教会風モスクとでもいえようか」、と書いていた (*Ibid.*, p. 89)。これまた美しい建物に見えていたことがわかる。これは、十年後のハウエルズの見方に近い。

こうして、統領宮殿や聖マルコ聖堂のような、ヴェネツィアのゴシック建築やビザンツ風建築はしだいに人々に好まれる建築になっていったのである。

6. ルネサンス以後の建築物への嫌悪

しかし、ものごとは、なかなか直線的には進行しないもので、ヴェネツィアの中世建築が好まれるようになる一方で、今度は、ルネサンス以後の建築物が嫌悪される傾向も生じた。その過渡的状态を示している例として、ゴーチエに注目してみたい。

ゴーチエの *Italia* は、十九世紀半ば (1853 年) に出版された本であることは、すでに見たとおり

である。この見聞録のなかで、ゴーチエは、ヴェネツィアの中世建築を好む姿勢を示す。しかし、ルネサンス以後の建物に対するゴーチエの反応はやや複雑で、世俗建築については好意的だが、宗教建築についてはかなり厳しい評価を下している。

まず、大運河沿いのさまざまな館——もちろん世俗建築である——に関するゴーチエの評価を取りあげてみよう。

ゴーチエは、統領宮殿や聖マルコ聖堂についての発言から予想されるように、大運河沿いにある中世の館を素晴らしい建物であると考えていた。ゴーチエは、それらの館の建築家たちを、「中世の、名も知られていない、素晴らしい芸術家たち。この人たちが、ヴェネツィアへ独特の風情と独自性を与えたのだ」、といて賞賛する (*Italia*, p. 132)。そして具体的には、たとえば中世に建てられたカ・ドーロ邸 (Ca' d'Oro, 1434 完成) を、つぎのような喜びを感じながら見た。

大運河のなかで、もっとも魅力的な館の一つ。……この館は、全体に刺繍を施され、縁には鋸歯状の刻み、さらに全体に同様の透かし模様が入って、ギリシア的・ゴシック的・野蛮的な趣向で、幻想的で、空気のように軽快であるために、まるで大気の精たちの巣のために造られたとでもいえそうな建物である (*Italia*, p. 135)。

だがその一方で、ゴーチエは、「ルネサンス様式の古典的簡素さや優美な幻想性」も同時に好んで、大運河の「両岸には、どれもが魅力的で、違った風に美しいファサードが間断なく連続する」、と書いた。そしてルネサンス以後の建物について、コルネル・デッラ・カ・グランデ邸は「サンソヴィーノの傑作の一つ」と誉めたり、コルネル＝スピネリ館 (Palazzo Corner-Spinelli, 15 世紀末建築) やグリマー二館を、「サンミケーリの、がっしりした力強い建物」と誉めたり、ヴェンドラミン＝カレルジ邸 (Ca' Vendramin-Calergi, 1500-09 建築) を、「この館は、ヴェネツィアでいちばん美しい館で、建築の傑作である。建物の彫刻も見事な

出来映えである」と絶賛したのである (*Italia*, p.135)。

しかしゴーチエは、ヴェネツィアで見たルネサンス以後の教会建築は好まなかった。パラディオの代表作、レデントーレ教会 (*Chiesa del Redentore*, 1577-92 建築) に関連して述べられるゴーチエの態度表明に注目してみよう。

この教会は、優雅な様式で、調和・均整のとれたギリシア風の美しいファサードを備えている。パラディオは、こういう設計に優れていた。この種の建築物は、いわゆる「趣味の良い人たち」を喜ばせるものである。節度があって、純粹で、古典的なのだ。人はわたくしを野蛮だと非難するであろうが、この種の建物は、わたくしにはあまり魅力が感じられない。カトリックの教会のために、わたくしはビザンツ様式、ロマネスク様式、ゴシック様式しか許容しない。ギリシア芸術は、多神教にぴったり適合していたから、それを使って別の思想を表現するのは困難である (*Italia*, p. 229)。

ゴーチエは、ローマ・カトリック教の建物にふさわしいのは、ビザンツ、ロマネスク、ゴシック様式だけだと考えたのであるから、当然ながら、バロック様式の教会は好まなかった。ゴーチエは、スカルツィ教会 (*Chiesa degli Scalzi*, 1660-80 建築) のような、現在では一般にバロック様式と分類される建築様式を「ロココ様式」と分類し、それを「イエズス会趣味」と呼んで、つぎのように酷評している。

イエズス会趣味はどうかというと、瘤のような丸屋根、浮腫のような円柱、太鼓腹のような手すり子、ジョゼフ・プリュドムの飾り書きのように曲がりくねった渦巻装飾、腫れ上がったケルビム、去勢された天使、ナプキンを下げてひげ剃りを待っているような巻軸装飾、キャベツのように大きいキクジシャ葉飾り、病気の石材のポリープを直そうとするかのように不健全な気取りと興奮した装飾、

という体裁のものである。こういう趣味に対して、わたくしは抑えがたい嫌悪を感じると公言しよう。それは不快にさせるどころか、吐き気を催させるものだ (*Italia*, pp. 235-36)。

ヴェネツィアの建築物に対するゴーチエの傾向を要約すれば、中世の建築物については、教会建築・世俗建築をどちらも好み、ルネサンス以後の建築物については、世俗建築は受け入れ、教会建築は嫌悪した、といってよいだろう。

ヴェネツィアのルネサンス以後の世俗建築物をこういうふうに誉めるのは、いわば伝統的態度とでも呼べるものであった。コーリャットは、当時新築されたグリマーニ館を「素晴らしい外観を呈している」と誉めたし (*Cruditie*, p. 166)、すでに見たとおり、ラセルズもそうであったし、ド・ブロスも美しい建物の実例として、グリマーニ館・ペザロ邸 (*Ca' Pesaro*, 1676-1710 建築)・ラビア館 (*Palazzo Labia*, 17 世紀末～18 世紀初頭建築) とルネサンス以後の建物を列挙したし (*Lettres d'Italie*, I, p. 212)、モンテスキューも、グリマーニ館を「ヴェネツィアでいちばん美しい館の一つ」と見たのである *20。

7. ラスキンの

ところが、ゴーチエがこのように書いたのと同じころから、ヴェネツィアのルネサンス以後の建築物が、包括的に——教会建築ばかりでなく世俗建築も——嫌悪される傾向が生じる。

この現象に関して要の位置を、少なくとも英語圏で占めるのが評論家ラスキン (*John Ruskin*, 1819-1900) である。その理由は、ラスキンが『ヴェネツィアの石 *The Stones of Venice*』(1851-53) という大著を書いてヴェネツィアの専門家と目されただけでなく、そのなかで述べられている主張が強烈であったし、そもそも十九世紀後半の時点でのこの人物の影響力が大きかったからである。

ラスキンの『ヴェネツィアの石』は、ゴシック建築がいかにより美しく美しい建物であるかを説いた書物であった。ラスキンは、ゴシック建築一般

について、こう書いていた。

ゴシック様式の建物は、もっとも美しい建物であるばかりでなく、最善の、もっとも丈夫な建物でもある。……わたくしは、わが英国の建物にもゴシックの形態を採り入れるよう訴える者であるが、その理由は、この形態がただ単に美しいだけでなく、日常的に使用可能な素材の場合に、唯一これだけが信頼性に富み、丈夫で耐久性のある、立派な形態の建物であるからだ*21 (The Stones of Venice, II, p.312)。

そしてラスキンは、特にヴェネツィアのコシック様式の館を、つぎのように美しい建物だと力説していた。

ルネサンス様式の館は、簡素さと洗練が、それらの建物の足下で営まれている豊かで荒々しい海上生活の混乱と対照されるから、見て心地よいものになるのである。……それらの館の足下から、漁船のオレンジ色の帆や、黒いゴンドラの滑らかな動きや、荷船の山積み甲板や荒くれた水夫たちや、館の土台のところに生じる緑色の水の動揺を取り去ってしまえば、ルネサンス様式の館は、ロンドンやパリの館と同じで、おもしろ味などない。しかし、ゴシック様式の館は、それ自体が絵画的であり、それ自体が力を持っている。海や空や、その他の飾りを取り去ってしまっても、やはり美しくて不思議なものなのである (The Stones of Venice, II, p. 270)。

そしてラスキンは、とりわけ統領宮殿について、他のルネサンス建築からわりあい離れた場所にあるので、ゴシック様式の魅力を存分に発揮しているという。

そのほかのゴシックの建築物は、いつも側にルネサンス建築が置かれているために被害を受け、ルネサンス建築は、側のゴシック建築によって助けられている。ゴシックの建物は

自分の持っている命を、冷たいルネサンス建築に吹き込んでやって、命をすり減らしている。しかし統領宮殿は、わりあい孤立しており、ゴシック建築の持つ力をじゅうぶんに発揮しているのである (The Stones of Venice, II, p. 271)。

またラスキンは、聖マルコ聖堂について、すでに『建築の七燈 The Seven Lamps of Architecture』(1849)のなかで、こういうふうに書いていた。

……ヴェネツィアの聖マルコ聖堂の西正面は、多くの点で不完全ではあるが、その釣合いの点で、そしてまた豊かで幻想的色彩による作品として、これまでに人間の想像力から生まれたもっとも美しい夢である*22。

ラスキンの、ルネサンス建築に関する嫌悪は、すでに引いた箇所にも窺えるのだが、その包括的見解は、つぎのようなものであった。

ルネサンス建築は、堅苦しく、冷たく、非人間的である。……この建築の持っている長所といえば、洗練され、高度に訓練され、深い学識を示しているところにあった。建築家も、それが平凡な精神の持ち主には味わえないものだということをよく承知しているのであった。……そして世間の人々の本能は、一瞬にして、これを感じ取った。こういう、古典的形態の新たな正確・厳密な法則のなかに、彼らは、威厳を示して面食らわせるのにぴったりのものを見つけたのである。君主たちがそれを喜び、廷臣たちもまたそれを喜んだ。ゴシック建築は神を崇拜するのにふさわしい建物だったが、これは人間を崇拜させるのにふさわしい建物であったのだ (The Stones of Venice, III, 74-75*23)。

そして、ラスキンがルネサンス建築に対して見せた嫌悪の例として、(すでに見たとおり)多くの人たちが絶賛していたグリマー二館に関する意見

を取り上げてみよう。

この館は、ルネサンス流派の主要建築のなかの、ヴェネツィアにおける主要なタイプであるし、またヨーロッパのなかでも最高のものの一つである。これは、入念に検討され、完璧に制作されている建築物である…… (The Stones of Venice, III, p. 44)。

これだけ読むと、ラスキンもこの館を賞賛しているように見えるが、じつはそうではない。ラスキンの主張は、つぎのように展開する。

〔たとえばグリマーニ館のような〕この中心的流派の洗練された建築作品は、いまだに、たいてい、現代十九世紀の学生の眼の前に、ゴシックや、ロマネスク、ビザンツ様式と対立する模範として置かれることが多い。そしてゴシック、ロマネスク、ビザンツ様式は、これまで長らく野蛮なものと思われてきた様式であり、今日の指導的立場の人たちによっても、いまだにそう見なされているものである。しかし、これらゴシック、ロマネスク、ビザンツ様式こそが、もっとも立派な美しい建築様式であり、それに対立するルネサンス様式は、ある種の完全さを持っていたとしても、全体としては無価値で、称賛に値しない様式だと証明すること、それこそ、わたくしがこの著述の労苦に取りかかった、そもそもの理由だったのである (The Stones of Venice, III, p. 45)。

ラスキンの論調は、こうして見てきたとおり、一方でヴェネツィアの中世建築を称揚しつつ、他方でルネサンス以降の建築を酷評するものであった。その論調は、しばらくのあいだ、功罪相半ばする役割を果たすことになる。功は、ヴェネツィアの中世建築に関して、すでに同時代の一部で共有されていた嗜好を強めたことである。罪は、ルネサンス以後の建築物を嫌悪する風潮を広めたことである。ただし、これもおそらくは同時代の一部で共有され始めていた気分を強化したというこ

とであっただろうか。

同時代的に共有されていた気分、あるいは共有され始めていた気分というのが、たとえば、ゴチエの *Italia* (1852) に見られたようなものである。*Italia* は、ラスキンの『ヴェネツィアの石』(1851-53) とほぼ同時に出版されているが、どちらの著作にも、互いの名前は言及されていないので、相互の影響関係は、たぶんない。だが、すでに見たとおり、ゴチエの中世建築に関する見方はラスキンによく似ていた。ふたりの態度は、ヴェネツィア建築に対する「ゴシック・リバイバル」の表れだったといっていよう。

ところで、すでにみたとおり、ゴチエとラスキンは、ルネサンス建築についての見方も半ば類似していた。しかし、それはあくまで半ばの類似にすぎなかった。ルネサンス以後の建築全般に関する嫌悪感を広めるについては、ラスキンの罪が少なくなかったといっていよう。

8. 悪影響

ハウエルズは、自分はラスキン主義者だという (Venetian Life, p. 165)。そのラスキン主義者ハウエルズが聖マルコ聖堂や統領宮殿についてどういったかは、すでに見た。そこには、ビザンツ、ゴシック様式への嗜好が表れていた。他方、ハウエルズにはルネサンス以後の建築物全体を嫌悪する面があり、それら両面が相俟って、まさしくラスキンの考えかたを受け継いでいることがわかる。

ルネサンス以後の建築物へのハウエルズの嫌悪は、たとえば、つぎのような表現に窺える。

サルーテ教会は、大運河のいちばん立派な幅広い部分を睥睨している、冷たくて見事な教会である。この教会は、他のルネサンス建築様式の聖堂ほど眼に不快でないのだが、その原因はよくわからない (Ibid., p. 165)。

ルネサンス以後の宗教建築は、ハウエルズには、総じて不快であったことがわかる。

ルネサンス以後の世俗建築に対するハウエルズの姿勢は、大運河沿いに建ち並ぶ館に関して、「そ

この建物は、ゴシックの奇想あるいはルネサンスの悪趣味の氾濫が及ぶかぎり、装飾に贅を尽くしたものである」と、いっているところに明瞭に表れている (Ibid., p. 390)。

米国人作家ヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) も、ヴェネツィア滞在の印象記を綴るとき、つねにラスキンを念頭に置いていた。その関係は、批判しつつも、深く影響されている関係であったようである。

ジェイムズが十九世紀末 (1892 年) に書いた文章に、つぎのような箇所がある。ジェイムズは、自分ではゴシック様式のカ・フォスカリ邸を見事な建物だと思うのだが、これはラスキンが低く評価していた建物であるため、自分の判断に自信が持てない。ジェイムズの言葉を読んでみよう。

……ひよっとすると、この建物を高く評価するのは間違いなのかもしれない。こういう疑念や不安が、わたくしの頭をよぎる。建築物の問題になると、わたくしは、こういう気持ちに囚われることが多い。ちかごろは、イタリアでも、いや、ほとんどどこであっても、美しいものや冒涇されているものや無視されているものの前に立つと、そうになってしまいがちだ。われわれは、こういう場合に、ラスキンに見られているように感じて、落ち着かなくなり、自信を失う ("The Grand Canal", p. 42*24)。

ジェイムズに対するラスキンの影響力の大きさがすぐにわかる文章である。さらに、最後の文の主語が「われわれ」となっているところに注目すれば、ラスキンの影響力が、ジェイムズだけでなく、広い範囲に及んでいた——すくなくともジェイムズはそう思っていた——ことが推測される。

実際に、ジェイムズが、ヴェネツィアの建築物のなかで高く評価したのは、もっぱらこのフォスカリ邸のような中世の建物であった。フォスカリ邸については、こう書いている。

……背の高い正方形のゴシック建築フォスカ

リ邸は、これ [バロック様式のカ・レッツォニコ Ca' Rezzonico, 1667-1758 建築] よりも形態が堂々としている。フォスカリ邸は、十五世紀の建築作品でもっとも立派なものの一つで、対称と威厳の点で傑作である ("The Grand Canal", p. 42)。

他方、ジェイムズが好まなかったのは、たとえば、「醜いパラディオ作の教会」だという聖ジョルジョ・マッジョーレ教会 (S. Giorgio Maggiore, 1559-1614 年建築) や、バロック様式のカ・ペザロ邸であった。カ・ペザロについて、ジェイムズは、こういう。

この建物 [=カ・ペザロ邸] の主たる難点は、その形態の粗野さ以上に、形態の尊大な大きさである。初期の諸邸宅は、運河全体の景観を尊重しているが、この建物は、それへの配慮を欠いている ("The Grand Canal", p. 46)。

ただし、ジェイムズの見方は、全体的にはラスキンほど極端でなくなっていた。それは、「仮に館を一つひとつ取りあげることができるとすればの話だが、大運河にもっとも良質の壮麗さを与えているのは、もちろん初期の館であるけれども、公平に言えば、いくつかの後期の館も、そうである」 ("The Grand Canal", p. 37), という表現に見られるとおりである。とはいえ、中世の建物を一般にルネサンス以後の建物よりも優れた建物と見る点で、ジェイムズはラスキンの見方を継承しているといえる。

9. バロックとロココの教会建築

ところで、ヴェネツィアにあるルネサンス以後の建築物のなかでも、一時期、とりわけ嫌悪されたのがバロックやロココ様式の教会建築であった。

ゴーチエが、現在では一般にバロック様式と分類される建築様式を「イエズス会趣味」と呼んで酷評したのは、すでに見たとおりである。こういう嫌悪感を覚える建築の実例としてゴーチエが挙

げたのはスカルツィ教会であった。

ラスキンは、ゴーチエが「イエズス会趣味」と呼んだ様式を「グロテスク・ルネサンス様式」と呼んだ。その呼び方から予想されるとおり、ラスキンはバロック様式の教会建築を嫌悪していた。ラスキンも、ゴーチエが貶したのと同じスカルツィ教会について酷評しているので、それを読んでもみよう。

スカルツィ教会は、大理石をありとあらゆる方法で卑俗に悪用した見本である。それをおこなった人たちは、色彩を見る眼もなければ、また芸術作品の価値について一片の理解も持ち合わせぬ人たちであった (*The Stones of Venice*, III, p. 431)。

同様に、やはりバロック様式の聖モイゼ教会 (*Chiesa di S. Moise*, 17世紀建直し) について、ラスキンは、「ルネサンスのなかでもっとも低劣な流派の、もっとも低劣な実例として注目される」 (*Ibid.*, p. 394), と書いていた。

この聖モイゼ教会については、ハウエルズもこき下ろしているのだから、それを読んでみることにしよう。

聖モイゼ教会は、ルネサンス芸術が頂点に達した様式で、それは、いいかえれば、他のどの流派よりも低劣ということである。……この教会の外部は、どの点を探っても、唾棄すべきものであり、内部もまた一貫してひどい (*Venetian Life*, p. 300)。

ジェイムズも、スカルツィ教会については、こういう酷評を残している。

ロココ様式のスカルツィ教会はここにある。この教会は、すべて大理石と孔雀石で造られ、全体が冷たい硬質の光を発し、贅沢で、渦を巻いていて、醜悪である ("The Grand Canal", p. 50)。

こうしてヴェネツィアのパロックとロココ様式

の教会建築は、ゴーチエからジェイムズに至る半世紀間、嫌悪の対象になっていたのである。

10. 評価の好転

しかし、酷評されてきたバロックやロココの教会建築についての評価は、二〇世紀に入ると好転してゆく。その変化を先駆的に明瞭に示しているのがフランス人作家アンリ・ド・レニエ (*Henri de Régnier*, 1864-1936) である。レニエが二〇世紀初頭、1915年から1918年にかけて綴った随想 "*Venise menacée*" を見ると、それがわかる。レニエはパリにいて、自分の愛する都市ヴェネツィアが第一次世界大戦の戦乱によって破壊されるのを懼れているのだが、この随想のなかに、つぎの一節がある。

どれかの館、どれかの教会が、明日には、破壊された大理石と粉碎された煉瓦の山になってしまうのではないだろうか。それはダリオ館だろうか。それともあの魅力的な、バロック様式の聖マリア・デル・ジーリヨ教会 (*S. Maria del Giglio*, 17世紀後半建直し, 1678-83 ファサード模様替え) ——マリア・デル・ジーリヨという名でもっとよく知られ、聖マリア・ゾベニーゴという名でさらによく知られている、あの教会だろうか。われわれが、聖グレゴリオの渡し船から降りるたびに、何度となく前を通った、あの教会だ。ゾベニーゴ一族によって建てられ、バルバーロー族が十八世紀に建て直した建物。あのバロック様式の、出来のよい、楽しいファサードは、その十八世紀に造られたものだ (p. 177*25)。

レニエは、すでに十九世紀末 (1899年) から、ジェズイーティ教会 (*Chiesa dei Gesuiti*, 1726-36 建築, バロック様式)、ジェズアーティ教会 (*Chiesa dei Gesuati*, 1715-28 建築, ロココ様式) という教会建築を、一つの時代の表現として受け入れることができた人であった。随想 "*Sur l'altana*" (1899) のなかには、「十八世紀のヴェネツィア趣味がジェズアーティ教会の歪んだ

ファサードに表現され、ジェズイーティ教会では、渦巻装飾を作り出す緑色大理石の垂飾り、アルコーブの優美さ、オペラ風の壮麗さに表現されている」、という一節が見える。この点で、レニエは先駆的な感受性を持つ人であったといえる。

ちなみにレニエは、ヴェネツィアの建築物であれば、どのような様式の建物でも愛せる人であった。たとえばダリオ館 (Palazzo Dario, 1487 年完成) について、レニエはこう書いた。

……ダリオ館はわずかに傾いているが、そのことがまた、不規則で入念な優美さを増している。けっして大きくはないのだが、この館は、ビザンツ様式とゴシック様式を優雅に混ぜ合わせた装飾によって、とりわけ得難い外観を呈している ("Sur l'altana", p. 27)。

そして、ヴェネツィアのさまざまな館に関するつぎの表現からは、ビザンツ様式やゴシック様式だけでなく、ルネサンス様式と、(おそらくは) バロックやロココ様式も受け入れていることが読みとれる。

ヴェネツィアの館の多くでは、いちばん美しい部類の館の場合でも、庭園の楽しみには欠けている。それらの館は、建物の美しさだけで満足しているのである。しかし、いくつかの館は違う。これらの館は、ビザンツ様式がゴシック様式と混ざり合うファサードや、優雅で立派なルネサンス様式のファサードが、誇張と歪みの壮麗さを見せるバロック様式のファサードや、凝った風変わりな装飾を見せるロココ様式のファサードと隣り合わせているだけではない。つまり、壮大だったり、魅力的だったり、独特だったりする光景に留まっただけではないのである ("Les palais et les jardins", 1920, pp. 187-88)。

それどころか、1924 年に、ヴェネツィアを再訪したレニエは、「あちらこちらに、新しい建物も出来ているが、その様式は、あまり不釣り合いなものでもない」、といって二〇世紀初頭の新しい建

築物すら受け入れることができたのである。

もちろん、レニエは、プロツキーのいう、「ヨーロッパのスカイラインをナチの空軍なぞよりもっとメチャメチャに破壊した恐るべき戦後派」の建築家の作品は見ることはなかったわけで、仮にそういう建物を見たら、どういったかわからない。

おわりに

この拙稿では、ヴェネツィアの建築物に対してヨーロッパの文人たちの見せた反応を、十七世紀への転換期から現代まで、ざっと辿ってみた。冒頭でもいったように、拙稿で指摘した傾向の推移は、あくまで暫定的な結論である。その留保をつけていうなら、ヴェネツィア建築に対する傾向は、およそつぎのようなものであった。

十七世紀への転換期には、ヴェネツィアの建築物は、中世建築もルネサンス以後の近代建築 (= 当時の現代建築) がどちらも好まれていたようである。

しかし、十七世紀の半ばごろには、ルネサンス以後の建築物を好んで、中世建築を嫌う傾向がはっきりと見られはじめる。

ルネサンス以後の建築物を好み、中世建築を嫌うこの傾向は、十八世紀には決定的になった。この傾向はさらに十九世紀前半まで受け継がれていったようである。この傾向は、ヨーロッパ人が、古代ローマの文物を——そしてそれにつづいて古代ギリシアの文物を——好んで、中世の文物を侮蔑した一環であったろう。

しかしその一方で、十九世紀の初頭には、ヴェネツィアの中世建築を好ましく思う感受性が兆していた。この傾向はこの世紀半ばにかけて強まっていたようである。それは、いわゆる「ゴシック・リバイバル」現象の一環であっただろう。

十九世紀の半ばに、その傾向の強まりを反映しつつ、傾向をさらに強める役割を果たしたのがラスキーンであったように思われる。

ところで、ヴェネツィアの中世建築を好む姿勢には裏面があった。中世建築が好まれるようになるにつれて、ルネサンス以後の建築物が嫌われる傾向が生じたのである。ルネサンス以後の建築物のなかでは教会建築が特に嫌われたようである

が、ラスキンのように、ルネサンス以後の建築物をほぼ全面的に嫌う人たちもいた。

ラスキンのこういう態度は、十九世紀後半に、すくなくとも英語圏の文人には、かなり大きな影響を与えていたようである。

ルネサンス以後の建築物のなかでもとりわけ嫌悪されていたのが、バロックおよびロココ様式の教会建築であった。これらの教会建築が嫌悪されずに受け入れられるようになるのは、二〇世紀への転換期ごろからであろうと思われる。

潟のなかの小島でしかないヴェネツィアだが、その限られた地域のなかに、歴史的な事情から、十一世紀から十八世紀にいたる、時代と様式を異にする古建築が密集している。その結果、この小島は、ヨーロッパの文人たちの反応を試す実験室のような役割を果たしたといえることができるだろう。

【註】

- *1 Joseph Brodsky, *Watermark*, London: Hamish Hamilton, 1992. 金関寿夫訳『ヴェネツィア——水の迷宮の夢』集英社, 1996.
- *2 Volker Michel, ed., Hermann Hesse, *Italien*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1983, p. 171.
- *3 William Dean Howells, *Venetian Life*, 1895; rpt. New York: AMS, 1971.
- *4 R. E. Prothero, ed., *Private Letters of Edward Gibbon*, New York: Fred de Fau & Company, 1907, p. 62.
- *5 F. d'Agay, ed., *Lettres d'Italie du Président de Brosses*, 2 vols., Paris: Mercure de France, 1986, vol. I, p. 189.
- *6 *View of Society and Manners in Italy*, 2 vols., 5th ed., London: A. Strahan & T. Cadell, 1790.
- *7 *Coryats Crudities*, London, 1611.
- *8 Fynes Moryson, *An Itinerary*, 1617; rpt. New York: Da Capo Press, 1971.
- *9 Richard Lassels, *The Voyage of Italy*, Paris: 1670.
- *10 *Guida d'Italia: Venezia*, Milan: Touring Club Italiano, 1985; Antonio Salvadori, *Venezia: Guida ai principali edifici*, Venice: Canal & Stamperia Editrice, 1995 (陣内・陣内訳『建築ガイド 4——ヴェネツィア』、1990版の訳、丸善 1992)。
- *11 Hyppolyte-Adolph Taine, *Voyage en Italie: vol. II: Florence et Venise*, Paris: Hachette, 1866.
- *12 G. Cacciapaglia, ed., *Deutschsprachige Schriftsteller und Venedig vom XV. Jahrhundert bis Heute*, Venice: Stamperia di Venezia Editrice, 1985, p. 145.
- *13 『ヴェニスに死す』新潮社, 1971, p. 669. Thomas Mann, *Der Tod in Venedig und andere Erzählungen*, Frankfurt am Main: Fischer, 1950, p. 21.
- *14 C. Harrison et al., eds., *Art in Theory 1815-1900: An Anthology of Changing Ideas*, Oxford: Blackwell, 1998, p. 162.
- *15 Quoted in Ruskin, *The Seven Lamps of Architecture*, in E. T. Cook & A. Wedderburn, eds., *The Works of John Ruskin*, vol. VIII, London: George Allen, 1903, p. 206.
- *16 *Ibid.*
- *17 E. Haufe, ed., *Deutsche Briefe aus Italien: Von Winckelmann bis Gregorovius*, Munich: C.H. Beck, 1987, p. 206.
- *18 Quoted in M.-H. Girard, ed., Théophile Gautier, *Italia: Voyage en Italie*, Paris: La Boite à Documents, 1997, p. 425.
- *19 Girard, ed., Théophile Gautier, *Italia: Voyage en Italie*.
- *20 Montesquieu, *Voyages*, in R. Cailliois, ed., *Oeuvres complètes*, vol. I, Paris: Gallimard, 1971, p. 568.
- *21 E. T. Cook & A. Wedderburn, eds., *The Works of John Ruskin*, vol. X, London: George Allen, 1904.
- *22 E. T. Cook & A. Wedderburn, eds., *The Works of John Ruskin*, vol. VIII, p. 206.
- *23 E. T. Cook & A. Wedderburn, eds., *The Works of John Ruskin*, vol. XI, London: George Allen, 1904.
- *24 J. Auchard, ed., Henry James, *Italian Hours*, Pennsylvania: Pennsylvania State Univ. Press, 1922.
- *25 Henri de Régnier, *La vie vénitienne*, Paris: Mercure de France, 1963.

Venetian Architecture and Men of Letters

TORIGOE J.I. Teruaki

Venice, a tiny island city in a lagoon, has a history of over a thousand years. It could not modernize itself during the nineteenth century when other European cities rapidly changed their faces, and it has consciously preserved its old features during the twentieth century. As a result, this small city is full of old buildings of different ages and styles. They stand side by side, only interspersed by a small number of modern buildings. It is remarkable that in this city, not only old churches and palaces, which any city would preserve as its cultural heritage, but also houses of common people are often several centuries old. The city as a whole, therefore, is a sort of museum of old building styles.

The city has also been a sort of laboratory in which writers of different ages and places have shown responses towards its buildings in various styles.

This essay attempts a rough sketch of the general trends of the attitudes of European writers towards Venetian architecture from the turn of the seventeenth century to the twentieth century.

At the turn of the seventeenth century, the writers who visited this city liked both the buildings erected in the Middle Ages and those erected after the Renaissance. In the second half of the seventeenth century, there was a trend towards disapproval of the medieval architecture of Venice. In the next century, along with the general dislike in Europe of what was medieval, the dislike of medieval Venetian architecture was dominant among the writers who saw the city, while its architecture of later ages was appreciated.

Thus, although St. Mark's Square with its surrounding buildings was an object of admiration at the turn of the seventeenth century, the important components of the square, St. Mark's Church and Ducal Palace, began to be disliked possibly from the second half of the century and remained objects of displeasure well into the nineteenth century, before the square with all its buildings became once again an object of general admiration.

While the dislike of medieval Venetian architecture continued well into the 1800's, some writers began approving of the architecture from the beginning of this century, and this latter tendency, which may be regarded as part of the Gothic Revival, grew stronger towards the middle of the century.

Ruskin was affected by this trend and strengthened it as well. His likes and dislikes of Venetian architecture seem to have had a strong influence among English-speaking writers in the latter half of the nineteenth century.

It is notable that while medieval Venetian architecture became appreciated, the architecture of later ages became disliked, particularly churches built in Baroque and Rococo styles. They only began to be viewed without disdain at the turn of the twentieth century.

キーワード	Venice	architecture	men of letters
-------	--------	--------------	----------------